



都立駒場高校～大学～就職へ 駒場高校 卒業生のストーリー紹介



07都駒高第1487号

都立駒場高校をご検討中の中学生やその保護者の皆様
へ卒業生から魅力を伝えてもらう企画です。

2020年度卒業生(駒73)

藤掛 智也

進学先:中央大学 法学部 政治学科

進路:日本製鉄株式会社



弁論部の代表として
大会で挨拶する様子(2022/6)



私は2021年に本校を卒業しました。大学では政治学を学ぶ傍ら、弁論部で社会問題の解決を訴えるスピーチを行っていました。数えきれないほどある本校の魅力の中から、2つに絞ってお伝えします。

1つめは生徒達の学業・部活動・行事の全てに力を注ぐ姿勢です。授業はどの教科もハイレベル、部活動も強豪揃いで、都駒祭(文化祭)や文化部発表会など行事も目白押しです。生徒達は、これら全てをやり抜くため多忙な日々を送ります。私も、気力漲る優秀な同級生達に影響されて、学業に励みつつ陸上部の部長を務め、3度の文化祭では責任者を務めました。この経験を通して得た「選り好みせず様々なことに挑戦すれば、思いもよらない学びを得られる」という教訓は、今でも私の中に息づいています。

2つめは先生方の手厚いサポート体制です。進学指導は勿論のこと、生徒が望む挑戦であれば全力で応援してくれます。私は、国語の授業でビブリオバトル(5分間で自分が面白いと思った本を紹介する競技)に取り組み、都大会に出場しました。その際、国語と司書の先生方が放課後つきっきりで発表指導をして下さいました。お陰で都大会にて結果を残すことができ、話す力を磨こうと大学で弁論部に入部するきっかけとなりました。

勉強も、部活動も、行事も、全て悔いなくやり切りたい!そんな「欲張りな」あなたを認め、支えてくれる環境が本校にはあります。ご入学を心よりお待ちしております。

[～学年団より～]

本校で初めてビブリオバトル(書評合戦)東京都大会の準決勝に進出し、自身の得意なことに新たに気づいた生徒。人望がとても厚く、前向きにチャレンジしてみる姿勢、計画的に準備をしてよりよく改善する様がありました。その後の後輩からは、先輩のように頑張りたいという声が多数聞かれた生徒です。図書館でもメッセージを掲載していて、今も藤掛くんが選んだ本を借りていく在校生の姿があり、影響を与えてくれました。

2020年度卒業生(駒73)

門司 奈乙

進学先:北海道大学 文学部 人文科学学科

進路:六花亭



【大学生の頃の活動写真→】



私は2021年に駒場高校を卒業し、今は北海道で暮らしています。私が日々大切にしているものは「仲間」と「楽しい！大好き！」です。一緒に何かをする仲間と向き合うこと、自分の「好き」や「楽しい」の気持ちを大事するということで、これらは駒場高校の3年間で気づき、築いてきたものです。

私の高校生活は演劇部一色でした。大好きな演劇に毎日全力でした。その中で、たくさんぶつかりあい、自分や仲間を見つめ直して、大事な仲間に出会いました。そして、周りには、全力で私たちを思い、全力で向き合ってくださる本気の大人たち、先生方がいました。クラスには、自分と同じように、それぞれの「楽しい！大好き！」にまっすぐ全力なクラスメイトがいました。いろんな人がいて、それぞれの「楽しい！大好き！」を応援できる人たち、そして行事などでは「いいね！みんなでやろうよ！」と一緒に全力で楽しめる人たちでした。今でも、クラスのあの人はどうしているかな、あの先生は元気かなと思い出し、その度に温かい気持ちになります。いや、温かいどころかアツくなります。部活の仲間たちは何かあれば、何かなくてもすぐに電話をしてはくだらない話で盛り上がります。離れても、私の中で「駒場」はそれだけまだ近い距離にあります。

おかげで私は、大切な仲間が様々な場所にたくさんいて、ずっと今が「楽しい！」です。今の私を作ってくれた駒場高校での大事な大好きな3年間に感謝です。

【～学年団より～】

常に1つ1つの学習や部活動での活動や行事を大切にしている生徒でした。コツコツと丁寧に行い、右肩上がりに成績も成長もぐんぐんと伸ばしていった様子がありました。他者の気持ちを大切に、他者の変化によく気づき、フォローする優しさを、教室でも部活動でも発揮していました。卒業後も、卒業生の同級生の部員らとともに演劇部のレッスンへ訪問しにきてくれる、後輩思いな様子も見せてくれました。

2020年度卒業生(駒73)

清水 虹希

進学先:慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科



<暮らしを彩るブランドデザイナー>

清水 虹希 さん



<自己紹介>

2002年東京生まれ。慶應義塾大学SFC在籍。高校3年生の時に始めた「渋谷肥料」で商品企画をする傍ら、大企業のブランディング案件や新規ブランドの立ち上げなど、様々なブランドデザインに関わってきました。現在は「獨方ライフスタイルブランド」の立ち上げを行なっています！

今まで探究してきたこと

私は「食品ロスをビジネスで解決すること」を探究してきました。高校3年時に立ち上げメンバーとして参画した「渋谷肥料」では、渋谷から出た生ゴミを肥料に変え、高付加価値な商品として展開することで循環を生む取り組みを行なってきました。それまでボランティアや留学を通して食品ロスの現状や解決策を調査していましたが、持続可能なビジネスとして解決する必要性を感じ、渋谷肥料を始めました。そんな活動や様々な起業家との出会いを通じて、優れたモノやコトを人々に届けるためには広義の「デザイン」が持つ力が重要であることに気付かされました。その後、新たな視点や選択肢を社会に届ける「ブランドデザイン」という手法を実践的に身につけようと、6つのモノ/ブランド作りに携わりました。それは単にかっこいいグラフィックデザインを作ることではなく、想いを具現化し、新たな物語を紡ぐことです。



きっかけ



高校1年生の時、英語の教科書でフードバンクの取り組みを知ったことが、私の探究の始まりでした。その内容を学ぶうちに、中学時代にケータイ屋での職場体験で目にした大量廃棄の光景を思い出し、食品ロス問題への関心が芽生えました。当時、食品ロス削減先進国として対策が進んでいたオーストラリアへの1年留学を控えていましたが、日本を含む世界の食品ロスの現状を探究することを決定。データや事例を収め、現状を深く理解するための調査を進めました。

その過程で「ソーシャルビジネス」という概念と出会い、食品ロスを持続的に解決するには、このアプローチが必要だと強く感じました。この気付きが、後に「渋谷肥料」のプロジェクトへとつながる、大きなきっかけとなりました。

64

04

こだわり

渋谷肥料で特にこだわって開発していたのが「サーキュラースイーツ®」です。これは、渋谷の飲食店から出た生ごみを肥料化し、その肥料で作物を育て、その作物を使ってスイーツを作るというもの。生ごみを起点にスイーツを作ることで、生ごみの捉え方や既存のシステムをシフトさせることに挑戦していました。ビジョンに共感してくださったパティシエの方や、飲食店の方、デザイナーさんなど、様々な人と連携して、商品開発に取り組みました。



壁とその壁をどう乗り越えたか



サーキュラースイーツ®を創るにあたり、サーキュラーは仕組みとして機能することに価値があり、消費者が求めていた付加価値は別のところにあることを痛感しました。美味しいもの、おしゃれなものをつくることが必要で、それが出来て初めてコンセプトや社会的意義の共感に移行してもらえる、と。そうなると、どうしても資本主義の中で勝てるプロダクトを生み出さなければならない。この板挟みの中で「デザイン」は大きなキーワードであって、持続可能な仕組みのデザイン、ユーザーの感動体験のデザイン、そしてコンセプトと一緒にしたグラフィックデザインの質を追求することなどが大切になってくるのです。"良いプロダクト"をつくるために、メンバーでひたすら話し合ったり、色々な人の声を聞き続けたりしました。

これからの夢

私はこれまで、人々のライフスタイルを彩るような幾つかのブランド作りを通じて、新しい価値観や概念が生まれることによってできる「視点の余白」を創ることに熱中してきました。

私は幼い頃から、見た目や使い方の新しさがある新商品を見るのが好きでした。それらの商品は、既存の概念や世界の切り取り方を変えて、問い合わせかけているように思えたからです。私も、今までになかった価値観や、誰かの言葉にならない想いをプロダクトを介して具現化し、様々な選択肢がある日々の暮らしを彩り続けたいと思います。

付録『探究のセンパイ』 65

[~学年団より~]

清水さんは、在学時から上記に記載のプロジェクト「渋谷肥料」で課題解決に向けた探究活動を行っていました。卒業後も、本校の「総合的な学習の時間」にあたる「探究」の時間で、プロジェクトの内容を紹介しながら、探究型思考を生徒に見に付けてもらい、社会課題について関心を高める授業に協力していただきました。その後も、清水さんのように活動する卒業生に憧れを持つ在校生からの相談に乗っていただくなど、卒業後も在校生を気にかけてくれています。自身のやりたいことを新たに見つけながら、どうしたいかをよく考えながら、見極めて進んでいる様子でした。

2020年度卒業生(駒73・保健体育科)

広瀬 太一

進学先:筑波大学 体育学群

進路:筑波大学大学院 人間総合科学学術院

人間総合科学研究群 体育学学位プログラム



【写真:大きな学会に参加し、ポスター・発表者・参加者の数に圧倒され、研究って良いなと思った時のもの、とのことです。】

私は駒場高校を2021年に卒業し、現在は大学院生として、"スポーツ神経科学"という領域で研究に励んでいます。「研究」という高校時代に全く触れなかったことをやっていて、苦しくもあり、楽しくもある毎日を過ごしています。

私の駒場時代もまさに「苦しくもあり、楽しくもある毎日」でした。部活動や学校行事、毎学期のテスト、受験勉強と精一杯の毎日でした。駒場高校から離れて時間が経つたいま、客観的にあの日々を振り返ると、とても良い日々を過ごさせてもらったと感じています。

私は、学校とは「勉強する場所」ではないと思っています。近年は、塾も盛んで、YouTubeなどにも動画教材が充実していて、自主勉強する方が効率の良い人もいます。ですから、勉強するだけなら学校に行かなくても良いかもしれません。では、そんな学校で何をするかといえば、私の場合には、ありきたりですが「想い出」が大きかったです。「なんだそんなことか」と思われた方は想い出の素晴らしさに気づいた方が良いです。想い出は、語っても楽しいですし、振り返って学ぶことが無限にあります。そんな素晴らしい想い出たちは、駒場という環境が私をサボらせてくれなかったから、出来たものだと感じています。中途半端に過ごした日々に、良い想い出はできません。駒場には、物事に打ち込ませる空気感がありました。ぜひ、勉強以外のなにかを求めて、駒場高校に入学して頂けたら良いと思います。

私が大学院に進んだ理由は、物事の「なぜ?」を突き詰めたいという強い欲求があったからです。昔から断定された事や定説とされることに対して「それが本当に正しいのか?」「なぜその現象が起きるのか?」と疑問を持つ癖がありました。

加えて、自身が長く続けてきたスポーツやエクササイズという活動について専門的に深掘りしていくと、あらゆる現象に「脳」が関与していることに関心を持ちました。そのため、現在は運動にまつわる現象の神経メカニズムを解明する研究室に所属しており、日々実験に励んでいます。

大学院生活では、一つの事実を実験的に証明していく学術的な面白さを実感しています。その一方で、自分の行なっている基礎的な研究が社会に還元されるまでのタイムラグや、成果が見えるまでの遅さにもどかしさを感じることもありました。

私は「研究という文化」の誠実さや面白さに大きな魅力を感じています。だからこそ、今後は直接的でなくとも、何かしらの形で研究に関わるフィールドで生活したいと考えています。大学院は時間もお金もかかりますが、それ以上に学びの多い環境だと思っております。卒業論文だけで終わらず、より深く全力で研究に関わることではじめて、「自分がどんな領域特性のある場所で働きたいのか」を理解することができます。

[～学年団より～]

当時の広瀬くんは、ひたむきに学問や部活動、保本科ならではのプログラムの数々に向き合ってきた人に見えていました。進学先の目標を叶える着実な広瀬くんの努力していく姿に対し、周囲の仲間がみんなで応援し、ともに合格を喜んでいた姿が印象的でした。学ぶことの面白さを突き詰めていく姿から、卒業後もさらに成長し続けていこうとするひたむきさが変わらないこともうかがえます。